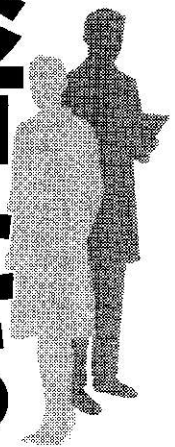


深掘りヒューマンドキュメント

被災地に生きざる医療者たち



懐かしい古里への帰還を巡り、住民が抱く不安材料のトップは、医療と介護施設の再開・充実だ。東日本大震災から5年。被災地医療のリアルを描く第2回の舞台は、岩手県で最も被害が大きかった陸前高田市。復興を医療から支えようと、東京の老医師が立ち上がった。

陸前高田市を襲った最大17・6級の巨天津波は、岩手県内で最も多くの死者（1602人）閔連死含む、行方不明者（204人）を出した。4042棟の家屋が倒壊し、町の風景は、一日で変貌した（※）。



復興のシンボル、希望のかけ橋、だったベルトコンベヤー（昨年9月撮影）

壊滅した沿岸部には、高さ20m、総延長3kmのベルトコンベヤーが建設され、

東京ドーム4杯分の土砂を運び入れ、土地のかさ上げ工事が行われてきた。昨年9月に工程を終え、復興のシンボルであったベルトコンベヤーは、今秋までに解体される。

2月末、済生会陸前高田診療所所長・伊東紘一医師（75）の往診に同行し、市内矢作町にある打越仮設を訪ねた。

第2回 岩手・陸前高田に根を張る老医師

大條陽一さん（82）宅に着いた時、ぱらぱら降っていた小雨は雪に変わった。「あの日も寒くて、霽が降ってたね」

そう言いながら、妻の啓子さん（77）が温かいコーヒーを入れてもてなす。陽一さんは震災以前に脳梗塞で倒れ、左半身に麻痺が残るが、装具を着ければ自力で少しは移動ができる。

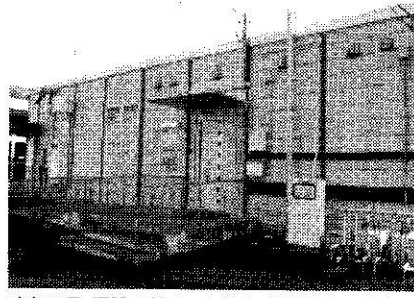
5年前の3月11日、陽一さんは週に2回通っていた小規模多機能センターでデイサービスを受けていた。市内気仙町の自宅に一人だった啓子さんは、揺れが収まるのを待って、近所の人

たちと山へ逃げたという。

「この人と一緒にいたら、私の力では引っ張っていけないし、置いて逃げるわけにいかないから、二人ともダメだったね」（啓子さん）

東京と盛岡にいる娘さんたちは、テレビで陸前高田の光景を見た時、両親は「もう亡くなっているだろう」と絶望したそうだ。避難所にいた啓子さんをNTTに勤務する知人が見つけ、連絡をとってくれた。

翌日、迎えに来た盛岡の娘さんの家に避難したが、3カ月で戻ってきた。陽一さんが、住み慣れた町で暮らすことを望んだためだ。



昨年10月、仮設で始まった済生会陸前高田診療所

伊東医師の診察を受けるようになったのは今年1月から。それまでは不自由な体で県立高田病院まで通院していた。高田病院も以前は気仙町にあったが、被災して今は市内米崎町の仮設で診療を続けている。

伊東医師は月に2回、看護師を伴って訪れる。陽一さんには、肺気腫、貧血、排尿障害、軽いパーキンソン症状もある。診療所に初めて来た時、紹介状には「てんかん」と記され、そのため処方された薬で強い副作用が出ていた。

「よだれが出たり、体がグニャグニャになって歩けなかったんですね。薬をやめ、貧血の治療もしたら、1カ月ほどで改善した。真っ白だった顔色もピンク色になって、目つきまでよくなったね(笑)」(伊東医師)
陽一さんは「すべて順調」



伊東医師(右)の診察を受ける大塚陽一さん

と答え、満面の笑み。若い女性看護師を相手に、冗談交じりの会話を楽しんでいった。肺気腫による喘息の発作は吸入器で抑えている。往診で採血も行い、診療所に持ち帰って検査する。

「県立病院だと、ずいぶん待たされるんですよ」
そう話す啓子さんも、診療所で内科と整形外科の治療を受けるようになった。

伊東医師は東京生まれで、日本大医学部卒。駿河台日大病院循環器科、放射線医学総合研究所、山梨県岳麓赤十字病院などを経て、1975年から自治医大に赴任し、臨床検査医学講座教授、同大付属病院副院長を勤めた。2006年より茨城県の常陸大宮済生会病院長、13年に名誉院長となった。

そんな伊東医師が陸前高田で診療所を始めたのは、ここが妻のカツ子さん(68)の古里だからである。

患者に話しかけるカツ子さん

余生をこの地に捧げようと決意

震災前は、それらがすべて瓦礫の山と化したのだ。「家内は、ここで拾った石

「戦場に入るみたいでした。でも緊張していたせいとか、不思議に怖くも気持ち悪くもなく、とにかく遺体を捜さなくちゃという思いだけでしたね」(カツ子さん)

た。くいしばったような顔で、主人に聞いたなら、これは窒息死だって」(カツ子さん)
弟の元男さん(当時58歳)

伊東医師は医療活動にも携わった。身元確認のために見た遺体は約800。陸前高田の犠牲者の半数に当たる。家族には見せたくない無残な遺体も多かったという。避難所にいる人たちの診察にも当たった。

と往復したが、カツ子さんが母親の吉田トシ子さん(当時86歳)と対面できたのは、6月のこと。既に火葬されていた遺骨の一体が、カツ子さんのDNAと一致した。発見された当時の写真も警察署にあった。

「むごたらしいものでし

東京と陸前高田を何十回

「むごたらしいものでし

しば救い、常に慰む」

目指す医療の姿だ。

「陸前高田は非課税世帯が3割もある。こういう貧しい人たちが助けなきやいけない。済生会の理念です」

済生会は「恵まれない人々のために施薬救療による済生の道を広めるように」という明治天皇の「済生勅語」に添えられた御下賜金を基金として創立された恩賜財団である。戦後、公的医療機関に指定され、社会福祉法人となった。伊東医師は済生会理事と話し合い、診療所開設を同会の復興支援計画に乗せ



実家があった場所に立つカツ子さん
(2011年3月、伊東医師撮影)



震災前の今泉地区 (畠山直哉さん撮影)

た。しかし、済生会も慢性的な医師不足。地元との交渉も、スタッフの人選も、伊東医師が前面に立って進めてきた。「震災後、県外から進出する初の医療機関」として、地元で歓迎されるはずだと思った。

ところが地元開業医の中には、「内科が増えたら、我々が食えなくなる」と言っただけで反対する者がいた。折衝の末、「整形外科を入れろ」との条件付きで了承をとりつけたという。伊東夫妻は昨年7月、東京の家を処分し、住民票を陸前高田に移した。平均12

坪もかさ上げされた市街地の高台には今後、住宅が建設されていく。診療所の開設予定地は4坪かさ上げされ、当初はこの4月から建設工の予定だったが、行政指導による土地養生のため、2カ月延期された。今年12月だった開院予定も、来年2月にずれ込んだ。

開業医では難しい検査の迅速性

一刻も早くしないと、被災者が戻ってこなくなる」と思った伊東医師は昨年10月、計画より1年以上早く診療を始めることにした。その仮設診療所は、本設予定地から気仙川を挟んで約1・6kmの竹駒町、陸前高田駅から徒歩10分ほどの場所にある。

JR大船渡線の気仙沼一盛間43・7kmは、3年前からバス高速輸送システム(BRT)によって仮復旧した。つまり、駅といっても、実際はバスの停留所だ。

この周辺に市役所、大型スーパー、薬局などが集まっておろ、いざれもプレハブの銀一色。竹駒銀座と呼ぶ人もいる。診療所は、スーパーの倉庫を借り受けて改装した平屋建ての171平方m。スタッフは、常勤の伊東

菌室のある県立大船渡病院血液内科へ紹介した。

最初にその男性患者と話をしたのは、待合室にいたカツ子さんだった。

「最近疲れやすく顔色も悪いので、周囲から病院に行くように勧められていたのに、病院嫌いで行かなかったそうです。でも、近くに診療所ができたから来て言っていました」

患者は大船渡病院で治療を受け、順調に経過。年末年始は一時帰宅でき、3月中旬には退院したという。

「この一例だけでも、1年早く始めたかかった」と、伊東医師は満足げだ。

他にも、この半年で、心筋梗塞、大腸がん、弁膜症、甲状腺腫などの患者を診断し、県立大船渡病院や気仙沼市立病院(宮城県)に送った。

「何よりこの素晴らしい点は、検査の迅速性です」そう断言するのは、助っ

開所初日、5人が来院した。そのうち、「体がだるい」と訴えてきた男性(74)は貧血があり、触診すると脾臓が腫れていた。エコーでも脾臓を確認し、血液疾患を疑った伊東医師は、所内で血液検査をして白血病と診断。すぐに、無

人の内科医、大谷寧子医師(61)。自治医大卒で、伊東医師を恩師と仰ぐ教え子の一人である。

「採血してその場で結果が出る。これは、一般開業医では絶対無理。金曜の午後受診して、月曜に採血の結果を聞きにいらつしやい、なんて言っていると、増悪してしまう。白血病の診断が早かったのも、ここの検査があつたからこそです」

元臨床検査学教授で、超音波研究のスペシャリストでもある伊東医師。ただ、診療所には単純X線と超音波診断装置(エコー)はあるが、内視鏡やCTは備えていない。

そのため、内視鏡検査は、市内の開業医で消化器専門医がいる鳥羽医院に任せ、CTやMRIが必要なら、県立大船渡病院に紹介する。県立高田病院にもCTはあり、入院(41床)や救急患者も受け入れている

が、現在、手術は行っていないため、急性期の患者は紹介しにくい状況だ。

「だから実質的には大船渡病院か、越県して気仙沼市立病院に頼む以外ないわけです」(伊東医師)

震災後、岩手県医師会が仮設診療所を開いたが、地元開業医が交代で診療に当たる態勢だったため、土曜・日曜主体の診療ならざるをえなかった。済生会の診

療所ができたので、そこはすでに閉所されている。

「診療所や病院が頑張っていたら、戻ってくる人も増えて町づくりができ、地域の活性化に貢献できるだろうと思つてやっています」

そう語る伊東医師の信条は、「医者自身が死ぬ前日まで患者のために働く」というもの。「本設診療所ができたなら、20年は死ねないなあ」と笑う。

人々を見守る「一本松」のように

昨年、在宅医療を2カ月続けた93歳女性を看取った。通院できない高齢者も多いだけに、往診を増やしたいが、そのためには、医師の数はまだ足りない。

「もちろん数だけでなく、質の高い医療を提供したい。最近では心療内科の必要性も感じています」

診療所の待合室には、いつも朗らかなカツ子夫人の

姿がある。住民たちは、来院すると気軽に彼女と話をして帰る。診療所というよりサロンのようだ。中には、診療所を「和泉屋の病院」と呼ぶ人さえいる。震災から5年、ずっとしゃべれずにいた人が、ここへ来て一気に溜まった思いを吐き出していったこともあった。

「山に駆け上がった助かった人は、建物を壊していく波が埃が煙みたいに見えたそうです。その人は奥さんが流されたし、消防団員がおばあちゃんを背負ったまま流される様子を、その息子さんが見ていたり、足の不自由な人が階段の途中まで来て流されたり……。地獄絵だつたと思います。現実にそれを見た人たちが、今ごろになって、海を見るのが嫌だとか話すんです」

月日がたつて落ち着くのではなく、被災者の気持ちはずっと不安定なのだとかツ子さんは話す。

高脂血症のため来院した女性は、高台に家を建て、娘一家と新たな生活を始めた。しかし、話を聞くと、市役所職員だった30代の息子を震災で失くしていた。彼女の診察を終えた後、伊東医師が漏らした。

「この時期になると、患者さんの気持ちに揺り戻しが来るみたいです。早く3・11が過ぎてほしい……」

その日は、来年も再来年も、その先もまたやって来る。

診療所を後にタクシーに乗ると、橋の上から「奇跡の一本松」が見えた。冷たい風雨に耐えながら、今も被災者を見守る細木。その根っこは枯れていることがわかったが、新たにこの地で根を張ろうとしている老医師がいる。



被災者を見守る「奇跡の一本松」